九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

【原典翻訳】ユースフ・アクチュラ『三つの政治路線』

小笠原，弘幸
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

秋葉，淳
千葉大学文学部

勝本，英明
九州大学大学院人文科学府

山本，敬祐
九州大学大学院人文科学府

他

https://doi.org/10.15017/1913915

出版情報：史淵. 155, pp.135-165, 2018-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門
バージョン：
権利関係：

【原典翻訳】ユースフ・アクチュラ『三つの政治路線』

（監訳）小笠原弘幸、秋葉淳
（共訳）勝本英明、山本敬祐、坂田舜、田中みなみ、岩元恕文

【翻訳にあたって】

本稿は、トルコ民族主義の発展に寄与したタタール人、ユースフ・アクチュラ（1876-1935）による小論『三つの政治路線』の全訳および訳注である。

アクチュラは1876年、ロシアのカザン近郊にあるシンビルスク[(1)]の裕福な家庭に生まれた。幼くして父を亡くした彼は、母とともに1883年にオスマン帝国の首都イスタンブルに渡って教育を受け、士官学校を卒業、エリート軍人としての経歴を始めるまでに至った。当時のオスマン帝国はアブデュルハミト2世の専制下にあったが、専制に反発し立憲政復活を目指す青年トルコ人たちのグループが秘密結社として活動していた。彼らと交流していたアクチュラは、咎められリビアに配流されるものの、友人アフメト・フェリト[(2)]とともに1899年パリに亡命する。パリでは自由政治科学学院（École Libre des Sciences Politiques）で学びつつ、亡命中の青年トルコ人たちと知遇を得て文筆活動を行うようになる。1903年にカザンに戻ったアクチュラは『三つの政治路線』の執筆を開始、翌1904年にカイロで発行されている『トルコ人』紙[(3)]に原稿を送った。当時のエジプトは、公的にはオスマン帝国の一部でありながらも、イギリスの軍事支配のもと、実質的に帝国政府から独立した国家となっていた。その中心都市カイロでは、帝国政府に批判的なオスマン知識人たちが亡命し、活発な出版活動を行っていたのである。

『三つの政治路線』は、『トルコ人』紙の24号から34号にかけ三回に分けて

無署名で掲載された。パン・トルコ主義の有効性を訴えるこの論考が『トルコ人』紙に掲載された当初、カイロの青年トルコ人グループ内での反響は芳しくなかった。しかし1907年にやはりカイロで出版された初版は、とくにロシアのムスリムに熱狂をもって迎えられた。そして、トリポリ戦争中にイスタンブルで刊行された1911年の第二版は、トルコ民族主義者たちの理論的指針となったのである[(4)]。

1908年に青年トルコ革命が起き第二次立憲政が始まると、アクチュラはイスタンブルに移り、革命を主導した統一と進歩委員会とは距離を置きつつもトルコ主義者として活発な活動を続けた。トルコ共和国成立前後にはパン・トルコ主義を放棄し、アナトリア・トルコ主義を基盤の一つとする共和国の公定歴史学を支えた。アタテュルクの側近の一人としてトルコ歴史協会会長にも就任、1935年に没した[(5)]。

前述したように、この『三つの政治路線』は、トルコ主義者たちのマニフェスト、トルコ主義の「共産党宣言」[(6)]というべき書物となり、ひろく読み継がれた[(7)]。その重要性から、トルコ共和国では数度にわたり現代トルコ語訳やラテン文字転写テキスト[(8)]が刊行されている。欧米語でも全訳・部分訳[(9)]があり、日本においても『世界史史料』に秋葉淳による部分訳が収録されている[(10)]。本訳稿でも、これら先行する訳業を適宜参照した。

なお本稿は、科学研究費26284106および16K03090による成果の一部である。

凡例

・底本は、1911（ヒジュラ暦1327）年刊行のイスタンブル版を利用した（Akçuraoğlu Yusuf, *Üç Tarz-ı Siyaset* (Matbaa-i Kader: İstanbul, 1911)）。『トルコ人』紙掲載版および1907年刊行のカイロ版との異同は、クルンチュ編のテキスト（注8参照）に詳細に記されているのでそちらを確認されたい。

・脚注は原注、文末注は訳注である。

・（　）は原文のままである。原文の《　》（　）は、適宜「　」に直した。また〈　〉は原著の頁数、［　］は訳者による訳文の補足、〔〕は訳者による追

加説明である。

・ラテン・アルファベットについて、太字体は原著者（アクチュラ）が記したフランス語の単語、ローマン体は訳者による原語併記である。

・訳文におけるゴシック体は、原文ではリカー体である。

【原典翻訳】『三つの政治路線』

〈3〉オスマン帝国において、西洋から学ぶことで力と進歩を獲得するという願望が目覚めて以来、主として三つの政治方針が構想され追い求められた（Ebaucher）と私は考える。その第一は、オスマン政府に従うさまざまな民族milelを同化し統一して、一つの**オスマン国民**millet-i Osmaniyeを創出すること。第二は、オスマン国家の統治者がカリフ権hukuk-ı hilafetを有していることを利用して、**すべてのムスリムを上述の政府の統治のもと政治的に統一すること**（西洋人が「パン・イスラム主義Panislamisme」と呼ぶもの）。第三は、人種に基づいた**トルコ人の政治的ナショナリティ** Türk milliyet-i siyasiyesiを形成すること、である。

これらの方針のうち最初の二つは、かつてオスマン国家の基本政策に重要な影響を与えた。最後のものはといえば、ただ一部の著述家の記述に見られるだけであった。

—1—

オスマン国民を作り出すという望みは、偉大なる理想的目標や至高なる希望にまで高まってはいなかった。本来の意図は、オスマン帝国にいるムスリムと非ムスリム住民に同じ政治的権利と〈4〉義務を与え課すこと、このように彼らのあいだに完全な平等を成し遂げること、思想と信仰について完全な自由を与えること、この平等と自由を利用して、前述の住民を、彼らのあいだにある宗教と血統の違いにかかわらず互いに混ぜて同化させて、アメリカ合衆国に

おけるアメリカ国民のように、共通の祖国でもって一つとなった新たなナショナリティ、［つまり］**オスマン国民**Osmanlı milletiを現出させること、そしてこのあらゆる困難な実験の結果として、「オスマンの至高の」国家を元来の外形で、つまり旧来の国境でもって堅持することであった。その大部分がムスリムで、その重要な部分がトルコ人である国家が永続し力が増加するのは、すべてのムスリムやトルコ人の利益になるけれども、この政治方針は、彼らに直接には関係していないのだった。それゆえオスマン国境の外にいるムスリムとトルコ人は、これにそれほど携われなかった。［オスマン国民創出という］問題は、地域的で国内的な問題であった。

オスマン国民創出の政策が真剣な形で生まれたのは、マフムト2世〔位1808-39〕の治世であった*。このパーディシャー〔帝王〕が、「私は我が臣民における宗教の違いを、ただモスク、シナゴーグそして教会のなかでのみ、見たいのだ…」と述べたことはよく知られている(11)。西暦の19世紀初頭から中葉にかけて、この政策がオスマン帝国で尊重され、〈5〉適用可能と見なされたのは当然である。このとき、ヨーロッパにおけるナショナリズムmilliyet efkârıは、フランス大革命をもって、血統や人種ırk(12)よりも良心の要請に基づいたフランス的原則kaideを、ナショナリティの原理として受け入れていた。スルタン・マフムトと彼の支持者たちは、彼らがよく理解できなかったこの原則を信じ込んで、人種および宗教の多様な国家の臣民を、自由と平等、そして相互の安全と友愛でもって混ぜ合わせて、単一の国民を創り出す可能性を信じていた。ヨーロッパにおける諸ナショナリティ形成の歴史において見られた幾つかの例も、彼らの信頼を増幅させた。実際、フランス人のナショナリティは、ゲルマン人、ケルト人、ラテン人、ギリシャ人、そして他の幾つかの血統の統合

---

* この方針は、セリム1世〔位1512-20〕までのオスマン朝パーディシャーの何人かによって、自然な形で求められたといえる。しかしこの追及は、ヨーロッパの模倣によってではなく〔ヨーロッパのナショナリズムの影響ではなく〕、おそらく状況の必然性から、イスラムがいまだよく根付いていなかったことから現れたのだった。従って、我々の主題外である。

から生まれたのではなかったか？ドイツ人のナショナリティには、多くのスラヴ諸民族unsurが含まれていたのではなかったか？スイスは、人種と宗教の違いにもかかわらず、一つの国民ではないのか？…前述の者たち〔スルタン・マフムトとその支持者〕がその当時、政治的統一の創出に努めたドイツ人やイタリア人の活動を、自らの方針の正しさの証明に裨益する出来事だと誤認したことは、ありえないことではない。

オスマン・ナショナリズムmillet-i Osmaniye fikriは、何よりもアーリー(13)とフアト(14)両パシャの時代において流布していた。フランス的原則の、［すなわち］国民投票（plébiscite）による諸国民形成の使徒ナポレオン3世は、この西洋化したパシャたちにとって庇護者であった。スルタン・アブデュルアズィズ〔位1861-76〕の治世におけるフランス的改革や、この改革の例であるスルターニー校(15)は、みなこのシステムが「流行alamod」だった時代の成果である。

〈6〉ナショナリティの原則milliyet kaidesiについていえば、ドイツ人によってより実態に近い形で、ナショナリティの原理は人種にあると解釈された。そしてこの解釈の勝利を意味する［18］70-71年の戦争〔普仏戦争〕でナポレオンとフランス帝国は没落した。そうしてこの時以来、「オスマン国民」という政治方針は、唯一の強力な支えを失ってしまったのだった。

実際のところ、ミドハト・パシャは、ある意味では名前を挙げた二人の高名な宰相の継承者ともいえたが、ミドハトの政治的プログラムは彼らに比べてより混乱し、かなり場当たり的であり、そしてミドハトの事績に追随するよう主張する今日の新オスマン人(16)たちのプログラムはとても曖昧であった。そのため、オスマン国民形成という空想が、フランス帝国とともに、そしてフランス同様に復活しないものとして、死んだと判断されても間違いではなかろうと私は考える。

＊＊＊

オスマン・ナショナリズム政策の失敗に伴って、**イスラム主義政策** İslamiyet politikasıが登場した†。ヨーロッパ人たちがパン・イスラム主義と呼ぶこの思想は、最近、新オスマン人的なものから、すなわちオスマン国民形成の政策に部分的に参加した集団から生まれた。かつて、何よりもまず「祖国」と「オスマン主義Osmanlılık」―つまり祖国に住むすべての人々から〈7〉なる一つのオスマン人たること―という呼び掛けでもって事を始めた新オスマン人の詩人と政治家のうち、多くの者の到達点が「イスラム主義İslamiyet」となった。ヨーロッパのなかにいたこと、西洋の諸思想を間近に見たことが、彼らのこの変心の最大の理由であった。前述の者たちが東洋にいたときは、彼らの頭は、18世紀の政治的・社会的哲学でいっぱいであった―彼らのうちの一人は、「ルソー」の翻訳者〔ズィヤ・パシャ〕(17) であった。しかし彼らは、血統と宗教の重要度を、まったく理解できなかった。とくに、新しいナショナリティを形成するには時すでに遅かったことを、［そして］オスマン国家の支配下にあるさまざまな諸民族anasırの利益でないにせよ欲求は、このような統一や混交にないことを、従ってフランス的国民原則が東洋において適用不可能であることを、まったく理解できていなかった。彼らの多くは、外国にいるときに自国を鳥瞰して見ることができ、そして東洋にとって徐々に増しつつある宗教と人種の政治的重要性を、それゆえにオスマン国民を創出するという希望の無意味さを理解することに成功したのだった。

もはやあらん限りの力を振り絞って、ムスリム諸民族anasırを―まずオスマン帝国にいる者たち、それから全世界にいる者たちを―、血統の違いに拘泥せず宗教における共通性を利用して完全に統一させることを、各ムスリムが幼少時に暗記した「宗教とミッレト (18) は一つである」という原則に従い、全ムス

---

† この政策は、数世紀前にも、オスマン政府が追い求めたものであった。ユルドゥルム・バヤズィト〔バヤズィト1世、位1389-1402〕、ファーティフ・メフメト〔メフメト2世、位1444-46, 1451-81〕、ソコルル・メフメト〔大宰相、任1565-78〕は、この思想に奉仕した。セリム1世が、ほぼすべての活動において、イスラム世界の統一を望んでいたのは明らかである。しかしこの時代については、本論考の範囲外である。

リムを、近年ミッレトという言葉に付与された意味で**単一の国民**millet-i vahideの状態にしようと努める必要を、彼らは確信した。これは一方では、オスマン帝国の〈8〉住人のあいだに分解と分裂を引き起こし、オスマン臣民のムスリムと非ムスリムは、もはや分離しかねなかった。しかし他方では、全ムスリムが一つになるような、大きな調和と統一をもたらすはずであった。この方針は、前述の方針に比べてより広い、新しい言い方でいえば、世界的（Mondiale）であった。最初は単に理論上のものであって、ただ印刷物のページ上に見られていたこの思想は、徐々にその適用も望まれるようになった。アブデュルアズィズの治世末期に**「パン・イスラム主義」**という言葉が外交交渉において語られるようになり、何人かのアジアのムスリム君主と関係を構築するための努力が払われた。ミドハト・パシャの失脚後[19]、つまりオスマン国民創出の思想が政府によって完全に放棄されたあと、スルタン・アブデュルハミト2世〔位1876-1909〕も、この政策〔イスラム主義〕の適用に努めた。このパーディシャーは、新オスマン人の容赦ない敵対者であったが、ある程度は彼らの政策上の弟子である。法の平等と完全な自由が保障されたとしても、非ムスリム臣民がオスマンの政治的共同体heyat-ı siyasiyeにはいなくなるであろうことを理解したあと、新オスマン人は、前述の臣民に、そして彼らの保護者であるキリスト教徒のヨーロッパに敵意を表し始めたのだった。パーディシャーの今日の政策‡は、そのように変心してのちの新オスマン人の思想にたいへん類似しているのだ…。

現君主〔アブデュルハミト2世〕は、スルタンやパーディシャーといった称号の代わりに、カリフという宗教的な属性の使用に努めた。彼の政策全般において、宗教〈9〉すなわちイスラム教が重要な地位を占めた。公立の諸学校の教育では、宗教的な事柄に割り当てられた時間が増え、教育の基礎を宗教化することが望まれた[20]。信心深さや敬虔さ―うわべだけかつ偽善であっても―は、カリフhilafet-penahîの恩恵を引き出すのに最も強力な手段となった。ユル

‡　論考が7年前に書かれたことをお忘れなきよう…。〔1911年版で付された注〕

ドゥズ宮殿[21]は、ホジャ、イマーム、サイイド、シャイフ、そしてシャリーフ[22]たちで溢れた。幾つかの官職に、ターバンを巻いた者たち[23]が任ぜられた。強固な信仰心を、いやむしろカリフの地位への—カリフの地位というよりも現在この地位に座っている人物への—献身と忠心の激しさを、非ムスリム諸民族akvamへの憎悪を、教唆するために民衆のなかに説教師たちが送りこまれた。あらゆるところでテッケやザーヴィエ[24]、モスクの建築と修復が進められた。巡礼者たちは重要視された。巡礼の時期にカリフの都〔イスタンブル〕darü'l-hilafetに立ち寄った巡礼者たちがムスリムの指導者İmamü'l-muslimin〔カリフ〕の種々の恩恵と恩寵に浴し、彼ら自身も他国のムスリムたちも、カリフ位の人物makam-ı hilafetに心が惹かれ結び付くよう努力が払われた。近年、ムスリム住人が多数いるアフリカ内部や中国地域に、使節が派遣された[25]。この政策を確実に実行するための手段として、ハミディエ・ヒジャーズ鉄道[26]の敷設が開始された。

しかしこの政治方針により、オスマン国家は、タンズィマート時代に放棄することを望んだ神政国家（Etat théocratique）の形態を再び得たのだった。もはや自由を、良心と思想の自由を、政治的自由を、同様に平等を、〈10〉宗教と人種の平等を、政治的平等を、文明的平等を放棄せざるをえなくなった。従って、ヨーロッパ流の立憲政府からの決別は、臣民間における民族cinsと宗教の相違や社会的状態の相違に由来する昔から存在する敵意と反感の増大を、そしてその結果として蜂起と反乱の増加を、ヨーロッパにおけるトルコ人への敵意の激化を、必然的に倍加させるのであった§…事実として、そうなった。

＊＊＊

§　私の目的を誤解しないでほしい。さまざまな民族anasırのあいだにある敵意と、ヨーロッパとオスマン国家のあいだにある諍いにはさまざまな理由がある。上述の理由は、そのさまざまな理由のうちただ一つであるにすぎない。

人種に基づくトルコ人の政治的ナショナリズムを実現させようという思想は、とても新しい。いままでのオスマン国家や過去の他のトルコ人諸国のいずれにも、この思想は存在しなかったと私は考える。チンギスやモンゴル人びいきの著述家レオン・カオン[27]は、この偉大なトルコ人のハンが全トルコ人の統一という壮大な目的でもってアジアを隅々まで征服したと書いているけれども、この主張が歴史的に完全に証明されたかについて、私は何もいえない[28]。

タンズィマートと新オスマン人の活動においても、トルコ人の統一という思想の存在についてのいかなる兆候も、私には見当たらなかった。故ヴェフィク・パシャ[29]は、その辞典をもって、純粋なトルコ語で著述することを望んでいたが、〈11〉この崇高な理想の背後で、少しだけでも［トルコ人の統一のために］立ち働いたかどうか、私は知らない。確かなのは、最近イスタンブルで**トルコ・ナショナリズム**を希求したグループは、政治的というよりも、学問的なグループを形成したことだ。このグループの形成においては、オスマン人とドイツ人の関係増大が、［そして］ドイツ語とくにドイツ人による歴史学と言語学についての研究をトルコ人の若者が知ったことが、大きく影響したと私は考える。なぜなら、この若きグループにおいては、フランス人の追随者にあったような幾つかの軽佻浮薄で大げさなdéclamatoire文学や政治活動以上に、寡黙で忍耐強く綿密に獲得された確かな学問が存在しているからである。シェムセッディン・サーミー[30]、『トルコ語詩集*Türkçe Şiirler*』の栄誉ある著者〔メフメト・エミン〕[31]、ネジプ・アースム[32]、ヴェレト・チェレビ[33]、ハサン・タフスィン[34]がこのグループの主要メンバーであって、『前進*İkdam*』紙[35]が、ある程度彼らの思想を普及させる媒体であった。彼らの活動が遅々たるものとなっているのは、現政府がこの方針を好意的に見ていないがためであろう**。

** 私が間違っていないなら、政府は、『トルコ史』〔レオン・カオン著『アジア史序説』を利用してネジプ・アースムが執筆〕の第二巻に出版許可を与えなかった。〔Léon Cahun, *Introduction à l'histoire de l'Asie*, Paris, 1896; Necip Asım, *Türk Tarihi*, vol.1, Istanbul, 1316 (1900)〕

オスマン帝国のイスタンブル以外の場所に、この考えの支持者がいるかどうか私は知らない。しかし、トルコ主義の政策は、まさにイスラム政策のごとく普遍的である。オスマン国境で制限されていないのである。従って、世界でトルコ人が居住する他の地域にも、目を向ける必要がある。

〈12〉最も多くのトルコ人が住むロシアでは、トルコ人統一の思想がとてもぼんやりとした形で存在していると、私は推測する。生まれたばかりの「ヴォルガ İdil 文学」[36] は、ムスリムである以上にトルコ人［的な文学］である。この思想がすんなりと発展するのにオスマン帝国よりもずっと適切な環境は、外圧さえなければ、トルコ人が最も多く住むトルキスタン[37] そしてウラルおよびヴォルガ流域なのであった。

カフカスのトルコ人たちにも、この思想が存在するに違いない。アゼルバイジャンにはカフカス人の思想的影響があるけれども、南のイランにいるトルコ人がどれほどトルコ人統一の支持者であるか私は知らない。

いずれにせよ、人種に基づいた政治的ナショナリズム創出の思想は、いまだとても未熟であり、ごくわずかにしか広まっていない。

—2—

さて、この三つの政策のうちいずれが有用かつ適用可能かを検討してみよう。

有用、とはいうものの、誰に、そして何に有用なのだろうか？[38]

まず、全人類に、としてみよう。この場合、人類の利益に資する方針あるいは政治的諸方針は何かを定めたあと、その方針もしくは諸方針を特定かつ限定された一部の人類に適用したとき全人類の利益になると証明し、さらにそのあとに、前述の三つの政治方針〔オスマン主義、イスラム主義、トルコ主義〕のうち一つあるいは幾つかが、先述の諸条件〔人類の利益に資するという条件〕をみたす方針もしくは諸方針と同一であると示す必要がある。私は、これがいますぐ可能であるとは思わない。というのも、当該の諸条件を〈13〉みたす政治方針あるいは諸路線を、いまだ人間の知は見出しえていないからである…。

上記の方法によらずに、三方針のうち一つあるいは幾つかをオスマン人やムスリムあるいはトルコ人に適用することでもって、それが全人類の利益になるという証明に着手するならば、方法が不完全であるため、完全に誤った結果となる。多くの社会的・政治的事柄において、この誤ちをもたらす方法の利用が習いとされていたが、実際には詭弁の類であるため、私は［この方法を］放棄する。

問題を少し限定しよう。［全人類ではなく］人類により構成された一つの共同体ではどうだろうか。

なおも、とても普遍的な問題に行きあたる。特定の社会の利益は何からなっているのか？これに答えを与えずには、あれこれの政治方針があれこれの社会に利益があるかどうか解決できない。既知のある社会の利益が何からなっているかを確定することは、政治的な問題である。つまり、「政治」と呼ばれる、いまだ主題と方法を確固として定めることができていない不完全な学問の重要な諸問題の一つである。政治学の諸問題について、演繹法と帰納法の支持者のあいだでいまなお論争が続いている。「第一の者たちがいうには、『政治的諸原理kavaidは、純粋に理論的である（idéal）。件の諸原理は、まさに数学の公理のように、先験的に（à priori）定められる。政府高官はこの諸原理を、建築家が幾何学の原理を適用するごとく、社会に適用する責務を負う』。第二の者たちは〈14〉『諸社会は、それらが従う諸原理を自身に含んでいて、成長と発展とともに現前する。従って、政治学は、人間活動への理想的目的の適用を諦めることなく、諸事件から歴史的社会的諸法則kavaninを引き出すことに、環境・状況・先入観・熱望を見逃さないように、努めねばならない』といっている」††(39)。政治学の方法におけるこの相違は、それに関する諸問題の大部分において、解決の確かな形を見つけることを阻害する。人間の諸社会の真の利益［が何かという問題］は、社会諸科学に携わる者たちによってとても多くの議論を呼び起こしているけれども、いまだ確定していない諸問題の一つである。

†† Liard, *Logique: Méthode des sciences morales*, p.185.

この不確かさにもかかわらず、各社会は自身の利益獲得を望み、事実上、常に変化している。つまり、上述の社会的問題は、実践的には、いつでもどこでも解決されているのである。この常なる変化の過程で、利益だとして実践されているものは、生存hayatである。生存は力でもって持続するために、生存の存在は、力の実在を必要とする。つまり、各社会はその利益を、生存において、つまり力を獲得し増やすことにおいて見出すのである。従って、生存を追求する生物のあらゆる種のあいだにあるのと同様に、諸社会のあいだには絶え間ない戦いが見られる。我々も、この解決法を認めなければならない。従って、各社会の利益とはその生存にあり、それゆえに力を有することにあるのだ。

〈15〉しかし、いずれの社会の利益のために、我々は尽力せねばならないのか？この問いに、論理的に答えることはできない。実際なぜ我々は、トルコ人やムスリムの利益に尽くそうというのに、たとえばスラヴ人や正教徒の利益のために努めようとしないのか？…とくに、ある社会の利益は、多くの場合、他の誰かが被害を受けることで成り立っているために、どのような合理的な理由に基づいて、人類の一部に被害を与えることの正当性を我々は示しうるのか？…

この問いに答えを与えうるのは、ただ我々の自然な性向―別言すれば我々の理性がいまだに分析できず正当化しえない、我々の感情―だけである。私は、オスマン人でムスリムのトルコ人である。従って、私はオスマン国家、イスラムİslamiyetそして全トルコ人の利益に奉仕することを望む。しかし、政治的、宗教的そして血統的であるこの三つの社会の利益は共通なのか？つまり、そのいずれかが強化されることは、他方も強化されることをもたらすのか？

オスマン国家の利益は、すべてのムスリムそしてトルコ人の利益に反しない。それは、その臣民たるムスリムとトルコ人がその［オスマン帝国の］強化とともに強化されるということだからである。それと同様に、［オスマン帝国以外の］他のムスリムとトルコ人も、［オスマン帝国という］後ろ盾を得るからである。

しかし、ムスリムの利益は、オスマン国家とトルコ人Türklükの利益に完全

に沿うわけではない。それは、ムスリムが力を獲得することが、オスマン臣民の一部（非ムスリムである者たち）の最終的な消滅を、そしてこのためにオスマン国家の現在の形態における力のうち一部分の喪失をもたらすということだからである。それと同時に、トルコ人が、ムスリムと〈16〉非ムスリムという宗教的相違で分割されることへの、従って無力化されることへの原因となるからだ。‡‡

トルコ人の利益については、これも、オスマン国家にもムスリムの利益にも完全に適うことはできない。というのは、イスラム社会を、トルコ人と非トルコ人という部分に分割して弱体化させるからである。そしてこの結果として、オスマン臣民のムスリムのあいだに不和が起こって、至高の国家の無力化をもたらすのである。

ここからわかるのは、それぞれ三つの社会に属する個人は、オスマン国家の利益に努めなければならないことだ。しかし、オスマン国家の利益、つまり力の獲得は、いままで存在し、我々の主題をなす**三つの政治路線のうち**、いずれを追及することにあるのだろうか？そしてこれらのいずれがオスマン帝国に適用可能なのだろうか？

—3—

オスマン国民の形成は、オスマン帝国の現在の国境を維持するための唯一の方法である。しかし、オスマン国家の真の力は、いまの地理的な形を守っているのだろうか？

オスマン国民が現れると、さまざまな諸宗教と諸民族ecnasに属する臣民から、自由と法的平等の上に作られた一つの混合国民millet-i muhteliteが登場するであろう。彼らはただ祖国（オスマン帝国）と国民（オスマン国民）という考えでもって一体となり、宗教的・民族的kavmiye営為から生ずる不和や争論

‡‡　非ムスリムのトルコ人はとても少ないことから、この最後の障害は重要ではない。

はなくなるであろう。そのとき〈17〉ギリシャ人やアルメニア人と同様、トルコ人やアラブ人も溶け合うであろう…。オスマン国家を打ち建てたオスマン・トルコ人たちは、ただ最初の指導者であるオスマン・ベイ〔オスマン1世、位1299?-1326〕の名を祖国と国民［の呼称］に用いることと、とくに父母たちの尽力によって起こった帝国がこれ以上分裂するのを見ずに済むという精神的利益でもって、満足するであろう…。おそらくは、オスマンルという呼び方についても差し障りが生じるであろう。つまり、その多数がかつて支配されていた（ムスリムと非ムスリムの）諸国民から構成されたこの自由の国においては、大多数の希望によって、かつての従属を示すオスマンルという名前すら、取り除かれるであろう！…

しかしながら、オスマン・トルコ人たちは、遠い昔から行使してきた主権のおかげで、おそらく限られたあいだは、帝国への物質的影響力を継続しうる。だが、社会的事柄におけるこうした慣性の力の発現は、自然のその他の事象においてそうであるように、短期間しか続かない。

オスマン国民のなかにいるすべてのムスリムについていえば、彼らが大多数を形成するであろうから、帝国の統治におけるすべての支配権kuva-yi hakimiyetが彼らの手に渡ること、従って精神的・物質的にムスリムの構成員unsurが、件の混合共同体heyet-i muhteliteにおいて最大の受益者となることが、必然だと思われる。しかしながらこの利益を構想する一方で、オスマン国民において宗教的相違は取り除かれず、真の平等は訪れず、さまざまな諸民族anasırは本気では溶け合わなかったということを、我々は考えるに至ったのである…。

〈18〉オスマン国民が創造されたとき、これに含まれるトルコ人とムスリムの影響力が増加しないということは、オスマン国家の力の減少を意味しない。実際のところ、我々の本質的な問題は、［トルコ人やムスリムに限定された力ではなく］国家の力にある[40]。その力は、確かに増加するであろう。整然として緊密な、つまり流行りの言い方ではブロックBlocを形成する一つの国民の住人は、恒常的な不和と争論の状況にあって分裂しつつある無政府状態のAnar[c]hiqueなる国家よりも、疑いなくさらに強力なのである。

しかし、本質的に重要な問題は、さまざまな民族cinsと宗教に属していて、いままで互いに争いと諍いが絶えない諸民族anasırの融合と混合が、今後、可能か否かにある。

上述のように、この件についての経験は、不成功で終わったのだった。今後、成功しうるかどうか考えるため、先の経験が不首尾に終わった原因を詳細に検討してみよう。

１－この融合と混合を〔つまりオスマン国民の形成を〕、ムスリム、とくにオスマン・トルコ人は望んでいなかった。というのも、600年という彼らの支配が法的に終わってしまい、長いあいだ支配下にあると見なすのが彼らの習い性となっていた非ムスリム臣民と、同等の水準にまで落ちてしまうからだ。この直近かつ最も物質的な結果として、このときまで彼らがほとんど独占していた官職や軍隊に非ムスリム臣民をも参加させねばならず、別の言い方をすれば彼ら〔ムスリム〕は、比較的苦労の少ない、高貴な人々（Aristocratique）から名誉と見なされる仕事の代わりに、彼らが不慣れでかつ卑しいと見下していた工業や商業に従事せねばならなくなるからだ。

〈19〉２－ムスリムは、望んでいなかった。というのも、信者たちの真の利益を、非常に物質的かつ人間的視点から見守るこの力強い宗教は、ムスリムと非ムスリムの完全に平等な権利を認めておらず、常にズィンミーを一段下にikinci kademede扱っているからだ。自由についていえば、イスラムは、あらゆる点から見て、他の諸宗教に比して最も自由を愛するものであるけれども、宗教であることからその起源は人知を超えるものであるため、絶対的真実からなるその基礎と原則から離れたあらゆる規則を、正道に反すると見なす。従って、人間が幸福を獲得するという目的による、思想と良心の完全なる自由を認めえないのだった。

３－非ムスリム臣民も、望んでいなかった。というのも、彼らすべてに近年

における進歩によって輝きを与えられた過去、独立そして政府があったからだ。ムスリム、とくにトルコ人はその独立を終わらせ、その政府を滅ぼしたのだった。オスマンの支配のもとでは、彼らの主張によれば、ほとんど公正ではなく圧政、平等ではなく侮蔑、安逸ではなく苦渋を見たのだった。財さらには栄誉や名誉すら、時折踏みしだかれた…。

西暦19世紀は、一方では、彼らに彼らの過去・状況・権利・ナショナリティを教えた。他方では、彼らの支配者を、［つまり］オスマン国家を弱体化させた。支配下にある同胞の一部が独立すら獲得できるほどに。

このあいだ、弱体化した支配者は、やむなく、しかし常にためらいがちに、友誼の手を伸ばした。主権を［互いの］あいだで分け合うこと、〈20〉権利を同じくすることを望んだ。支配者よりもおおよそ優れた洞察力を持つこの強化された被支配者たちは、差し出された手の幾つかが非常に親愛にして誠実であることをよく知っていた。しかし、このような新しい政策における西洋の影響を、オスマン国家の存在に彼ら自身の利益を見出す幾つかの西洋諸国の強制を[41]、彼らは見逃さなかった…。

おそらくは、一部の者たちの利益はオスマン国民の形成にあった。しかし彼らも、冷めた理性以上に、興奮した感情に従っていたのだった。誰も、ほんとうに誰も、彼らが過去の独立の死刑執行人と同一視する民族kavmと一緒に、それと混交し溶け合って、一つの新しい国民を生み出すことに同意しなかった。

４－オスマン人の最大の敵ロシアと、その従僕にして尖兵であるバルカンの小政権らは、望んでいなかった。というのもロシアは、海峡地帯、アナトリア、イラク、イスタンブル、バルカン、そして聖地の所有者になることを、そうして政治的、経済的、民族的millî、宗教的目的を達成することを希求していた。海峡地帯を手にすることで、艦隊のために黒海のような安全かつ大きな港を獲得し、国際的に最も重要な商業ルートの一つと見なされる地中海に自由に出られるようになる。そのあとこの堅固な襲撃拠点から好きな時に襲いかかって、当世のインドの隊商団とその護衛隊であるイギリスの商船と軍艦を攻撃し

て、連合王国の最も豊かな〈21〉植民地への道を断ちうる。要するに、かねてより目をつけていたインドを、その西方からさらに包囲し、アナトリアの所有者となることで世界の最も肥沃で豊かな大陸を統治下におき、イラクまで乗り出して西アジア全域を手にすると同時にインドの西門に達する。そしておそらくは、イスラムの社会、従ってイスラムの聖地をめぐる古くからのロシアとイギリスの争いにおいてロシア優位で均衡が破られ、そして最後に、海峡地帯とオスマンのアジアの重要な部分を手にすることで、ロシアは大きな政治的・経済的果実を集めるであろう。

バルカン地方を広大な帝国に併合することで南北のスラヴ人を統一し、そうしてアヤ・ソフィア(42)のドームに十字架を立て、正教の揺籃の地、つまりロシア人の宗教的な発祥地〔コンスタンティノープル〕を、［そしてエルサレムの］聖墳墓教会を統治下において、キリスト教の起源の地をその国土の一部と見なすであろう。そしてこの方法で、まったくもって過剰に信心深い臣民が感極まって望む最高の欲求を、宗教と魂の欲求を実現させるであろう。

この諸目的がたやすく成し遂げられるかどうかは、オスマン国家の無力さに、オスマン臣民が常なる不和と諍いの状況にあることにかかっていた。ゆえに、ロシアは、絶対にオスマン国民の形成に同意しないのであった。

〈22〉そのころようやく政治的生命を獲得したセルビアとギリシャ国家は、「トルコ人のくびきのもとにある民族的同胞たちmillettaşlarを」増やすことを望んだ。このためにも、オスマン臣民が分裂した状況にあることは彼らの利益に必要なことの一つであり、これに努めるのであった。

５－ヨーロッパ世論の一部も、望んでいなかった。というのも、ヨーロッパの世論を作り出す者たちの一部は、いまなおイスラムmüslümanlıkとキリスト教hıristiyanlıkの宗教的対立から、十字軍戦争の伝統から抜け出ていなかったために、キリスト教徒たちをイスラムの支配から解放し、さらには十字架の片隅をも三日月のもとに置かせず、異教徒（Infidêles）をヨーロッパの土地から、ナザレ人たちの国〔ヨーロッパ、もしくはエルサレムのことか〕から追い出す

ことを望んでいた。その幾人かは、［宗教ではなく］ただ人間性や科学の視点から判断して、「あらゆる種類の進歩［を実現する］能力を持つ［オスマン帝国支配下の］ヨーロッパの諸国民を、半野蛮人にして圧政者であり、戦闘以外の技術が見られないトゥラン人〔ここではトルコ人のこと〕のくびきから」救うこと、そしてこのアジア人を、彼らが来たアジアの平原に追い返すことを望んでいたのだった。しかしたいていこの二つの考えは互いに極度に混ざり合い、どちらがどちらから現れたのか、理解されえないほどに混乱した状況で立ち現れていた。

つまるところ、オスマン帝国内のあらゆる諸集団akvamの望みに反し、国外の障害にもかかわらず、オスマン政府の指導者数名は、ヨーロッパ諸国の一部に（とくにナポレオン3世のフランスに）頼って、オスマン国民を創り出そうとしていたのだった！〈23〉…この仕事は、不可能といっていいほどに困難であった。指導的地位にある誰もがみな賢明だとしても、なおこれほどの障害に立ち向かいうる見込みはとても低い。実際、事は不成功に終わった。

上記の障害の原因は、その当時から減少せず、増加し大きくなった。アブデュルハミトの政策は、ムスリムと非ムスリムのあいだの不和と反目を増した。非ムスリム臣民の一部もまた独立を獲得して、他の者たちのさらなる励みとなった。ロシアが徐々に力と勢威を増したため、オスマン国家への悪影響が増加した。セルビア、ギリシャ、ブルガリア、モンテネグロの［独立がオスマン帝国の非ムスリムに与えた］影響が生まれた。ヨーロッパ世論もまた、より反トルコ人に変じた。オスマン・ナショナリティ政策の最も強力な支持者の一人であるフランスは、パリ条約[43]の時期の権威を喪失し、ロシアの共犯者となった。要するに、国内外においてこの政策に完全にそぐわない環境が生じた。従って、私の考えでは、もはやオスマン国民創出に努力するのは、無益な骨折りである…。

＊＊＊

それでは、**イスラム統一**の政策が、オスマン国家の利益となるか否か、適用可能であるか否かを精査しよう。

先に示唆されたように、この政策を適用した場合は、オスマン臣民間での宗教的不和と敵意が増し、こうして〈24〉非ムスリム臣民および彼らが多数居住する国土の一部が失われ、従ってオスマン国家の力が減少せざるをえないのだった。

この他、一般的に、トルコ人どうしのあいだにムスリムと非ムスリムの違いが入り込むであろうし、民族性cinsiyetから生ずる同胞意識kardeşlikは宗教の相違でもって駄目になってしまっただろう。

しかしこうした障害に対して、オスマン国家の統治下のすべてのムスリムと、従ってその一部であるトルコ人は、非常に強い紐帯でもってしっかりと一つになったであろうし、そうして、多様な諸種族と諸宗教からなる「**オスマン国民**」に比してより堅固で、この堅固さのゆえに財産、人数、土地、富についての不足にかかわらず、より強力な共同体heyat、イスラムの共同体を創出したであろう。

より重要なことは、地上の全ムスリムが徐々に強くなるべく統一されることである。そして、このようにアングロ・サクソン人、ドイツ人、スラヴ人、ラテン人、そしておそらくは黄色人種ırk-ı asfarの［それぞれの］統一によって現れる強大な諸勢力のあいだで、存在を堅持することができる宗教に基づいた勢力〔統一されたムスリム〕が現れるために備えうるのである。この気高い望みの実現に、多くの時間がかかるのは疑いない。はじめは、単にいま存在しているだけの精神的関係が強化されて、将来の共同体heyatのただ不明瞭な計画が立てられるだけであろうが、徐々に輪郭がより明瞭になり、形が決定されて、いま上述された〈25〉確固たる巨大な恐るべき団体［統一されたアングロ・サクソン人、ドイツ人など］と競いうることのできる、アジアの大部分とアフリカの半分以上を支配する団体〔統一されたムスリム〕がつくられる結果になろう…。

しかしこの政治路線を、オスマン国家に成功裏に適用することは可能だろうか？

イスラムは、政治と社会の諸事に、大きな重要性を与える宗教の一つである。イスラムの基礎的な原則の一つは、「宗教とミッレトは一つである」という教えで表される。イスラムは、信者である人々の民族性cinsiyetとナショナリティ［の相違］をなくし、言語［の相違］を取り除くよう努め、過去と伝統を忘却させることを望む。「イスラムは強力な碾き臼である。それは、さまざまな民族ecnasや宗教に属する者たちをすり潰し、宗教的・人種的に単一で、同等の権利を有する互いにまったく違いのないムスリムを作り出す…」。

イスラムには、それが現れたとき、強力な整った政治的組織があった。その基本法はクルアーンであった。その公式の言語はアラビア語であった。その選ばれた指導者、聖なる支配の中心があった。

しかし、他の宗教の歴史において見られる変化は、イスラムにおいてもまた、ある程度まで観察される。人種の影響とさまざまな事件の結果、宗教が形成した政治的統一は部分的に損なわれた。ヒジュラからまだ1世紀も経たずして、アラブ人とイラン人acem両民族milletの対立が、ウマイヤとハーシム両家の反目[44]という形で現れたことにより、イスラムの統一への、癒えない傷が開いたのだった。〈26〉スンナ派とシーア派は、その大きな相違をあらわにした。もっとあとに、アラブ人とイラン人の諸民族anasırに、トルコ人やベルベル人等のようなさまざまな諸民族もまた混ざった。彼らは、イスラムの同質化・統一化・同化における強烈さにもかかわらず、彼らの民族的特性と情熱を部分的に保っていたことから、イスラムにおける思想と政治の統一はよりいっそう損なわれた。東洋においても、西洋とまったく同様に、群雄割拠tavaif-i müluk となった。イスラムのカリフ位は、精神的指導者たる役割をいくらか保持していたけれども、広大なイスラムの家は、各地で生まれた細々とした儚いアミール、スルタン、シャー、パーディシャーらの諸政権によってバラバラとなった。まもなくして、イスラムのカリフ位自体も二つに、さらには三つになった。公式かつ宗教的な言語も一体性を失って、ペルシア語はアラビア語に匹敵する権利を主張するに至った。

ある時期に至って、イスラムの力が奈落の底へ降り始めた。イスラムの諸国

土の一部分、徐々に大部分、四分の三以上が、キリスト教徒諸国の支配下に入って、イスラムの一体性に完全に亀裂が入った。

近年では、西洋思想の影響で、イスラムの望みにもかかわらず、完全には排除しえない部族的・民族的情熱taassub-ı kavmiye, milliye [45] が、非常に少ないけれども姿を現し始めた。

その力を傷つけたこれほどの諸事件にもかかわらず、イスラムはいまだ非常に力強い。ムスリムのあいだには、諸宗教に見られる猜疑あるいはそれより悪い不信仰が、いまだまったく入り込んでいないといえる。〈27〉イスラムのほぼすべての信者tabileriは、宗教の道における献身を厭わず、忠実な、熱い宗教的情熱を持つ、宗教的に一体の人々である。

幾つかのムスリム諸国の新しい法律kavaninは、イスラムのシャリーアから離れたけれども、その基礎はなおイスラム的な法律kavaninのごとく示されている。いまなおアラビア語は、唯一の宗教的言語であり、さらには多くの場所のムスリムにとって学問的・文学的言語であって、いまなおイスラム学院は—部分的な例外は別として—同じプログラムで同じ言語（アラビア語）による教育を続けている。要するに、イスラム文明は、本来の統一性を保って継続しているといえる。

いまなおすべてのムスリムは、「私はトルコ人である」あるいは「私はイラン人である」という前に、「神のおかげで、私はムスリムである！…」という。いまなおイスラム世界の大部分はオスマン・トルコ人たちのハーカーンをイスラムのカリフと認めている。いまなおすべてのムスリムたちは、日に五回、聖なるメッカに顔を向け、神のカーバに平伏して、黒石に接吻するために、まったき興奮と情熱をもって、世界各地からさまざまな困難に耐えつつ駆けつけるのである。繰り返しを恐れずにいえば、イスラムはいまだ非常に強力である。それゆえ「**イスラムの統一**」政策適用の際の内的障害は、わずかな困難でもって克服されるべき状態にある。しかし、外的障害は非常に手ごわい。実際、一方では、イスラム諸国はすべてキリスト教徒諸国の影響下にある。他方では、多少の例外を除くと、すべてのキリスト教徒諸国は、ムスリム臣民を有してい

る。〈28〉キリスト教徒諸国は、彼らの従属下にあるムスリムがたとえ強い精神的手段によってであれ、国境外の政治的中心〔オスマン帝国のカリフ〕に献身し、将来重要な結果を生じかねない普遍的思想fikr-i umumî〔イスラムの統一〕へ奉仕することを、彼らの利益に大いに反すると見なした。ゆえに彼らは、その登場を何としても阻害しようと欲しており、すべてのイスラム諸国に対して影響力をもっているがゆえに、彼らはこの望みを実行できるのである。従って、現在最強のイスラム国家であるオスマン国家であっても、［それが］本格的に**イスラムの統一**の政策を適用することに対し、彼らはおそらく阻害に成功するであろう。

＊＊＊

トルコ人たちの統一という政策における諸利益についていえば、オスマン帝国にいるトルコ人は、宗教的・人種的結束でもって非常に緊密に、単に宗教的であるより緊密に一体化するだろう。もともとトルコ人ではないがある程度までトルコ化した他のムスリム諸民族anasırはよりいっそうトルコ人Türklükに同化し、いまだまったく同化していないが国民意識vicdan-ı milliyeをもたない諸民族もトルコ化(46)させられうるだろう。

しかし、本質的で大きな利益として、それは、言語、人種、慣習、さらに大多数の宗教すら一つであり、アジア大陸の大部分とヨーロッパの東方に広がるトルコ人の一体化に、そして他のこのように大きな諸ナショナリティのあいだで存在を守りうる大きな政治的ナショナリティを形成することに、寄与するだろう。そしてその大きな共同体において、トルコ人の諸社会のうち最も強力にして最も進歩し最も文明化〈29〉しているために、オスマン国家が最も重要な役割を演じるだろう。最近の諸事件が考えさせたやや遠い将来に到来するであろう白人と黄色人の世界の狭間に、トルコ人世界Türklük cihanıが登場し、そしてこの狭間の世界においてオスマン国家が、いま日本が黄色人の世界で遂行しようとしている責務を引き受けるであろう。

こうした利益がある一方で、オスマン帝国に住む、ムスリムであるがトルコ人ではない、トルコ化されることも可能ではない諸民族akvamが、オスマン国家の手から離脱し、イスラムがトルコ人と非トルコ人という部分に分けられて、もはやオスマン国家と非トルコ人ムスリムとの真摯な関係が残らないという恐れがある。

トルコ人統一の政策を適用する際の内的困難は、イスラム［統一の］政策に比べて、より大きい。西洋の影響によってトルコ人のあいだにどれだけナショナリズムefkâr-ı milliyeが入り始めたとしても、上述のように、この出来事はいまだとても新しい。トルコ人Türklükという観念や、トルコ文学、トルコ人統一の理想は、まだ生まれたての子供である。イスラムİslamiyetにおいて我々が確認した強力な組織、生命力豊かで熱情に富む感情、要するに確固たる統一をもたらしうる事柄や準備のうち、ほぼ何一つトルコ主義にはないのである。今日、大多数のトルコ人は、自分たちの過去を忘れた状況にある！…。

しかし、次のことが忘れられてはならない。我々の時代において統一の見込みのあるトルコ人の大部分はムスリムである。このため、イスラムという宗教は〈30〉大トルコ・ナショナリティ形成に重要な要素となりうる。ナショナリティを定義することを望む者の一部は、宗教を因子（facteur）のように見ている。イスラムは、トルコ人Türklükの統一にそうした貢献ができるようになるために、近年キリスト教において起こったように、そのなかに諸ナショナリティの現出を認める形に変わらなければならないのである。この変化は、ほとんど必然である。すなわち、我々の時代の歴史において見られる一般的な潮流は、人種にあるのだ。宗教は、宗教であるという理由で、徐々に政治的重要性と力を失い、社会的であるよりも個人的となり、社会においては良心の自由が宗教の唯一性vahdetに取って代わり、宗教は、社会の事柄の調整者というより、献身的な心の導き手たることを引き受ける。単に、創造主と被造物のあいだの良心的つながりという状態になる。ゆえに、宗教は人種と一体化することによってのみ、人種への助力者さらには奉仕者として政治的・社会的重要性を保

ちうるのである。§§

外的障害は、イスラム政策に比べて、強力ではない。というのも、キリスト教諸国のうちただ一つ、ロシアにムスリム・トルコ臣民がいるのみだからである。従って、自国の利益のため、トルコ人の統一を妨げようとするのはただこの国だけである。他のキリスト教徒諸国については、一部の国はロシアの利益を損なうため、この政策を助長すらするであろう。

〈31〉

＊＊＊

以上の考察から、次の結論が導かれる。**オスマン国民**の創出は、オスマン国家のために利益を含んでいるが、適用不可能である。ムスリムあるいはトルコ人の統一を目指す政策は、オスマン国家にとって、同程度というべき利益と障害を含んでいる。適用面については、容易さと困難さはやはり同等といえる。

この状況で、いずれの採用に努められるべきか？『トルコ人』紙の題名を聞いたとき、私をいつも悩ませているその問いへの回答をついに見つけるだろうと期待し、その題名からしてこの回答はトルコ主義Türklükの政策であろうと、私は考えてしまった。しかし、私は気づいた―［『トルコ人』紙において］「その権利が守られ」、その考えが改良され、その思想が活性化されるであろう「トルコ人」とは、私が推察するに、いまですら北京からモンテネグロへ、ティモール島から黒人の国までのアジア、ヨーロッパ、アフリカのそれぞれ重要な地域に分布する偉大な人種に属する人々のうちどのトルコ人でもなく、ただオスマン国家の臣民である西トルコ人だけなのであった。『トルコ人』紙は、ただ彼らを見ているだけであり、彼らを知っているだけであり、そしてただ西暦14世紀以後［のみ］を、―フランスの資料によって―知っているだけなのだ…。従って、［『トルコ人』紙は、］この時代に同じ国家の臣民であってムス

§§　ロシアにおける正教、ドイツにおけるプロテスタント、イギリスにおける国教会、さまざまな国におけるカトリック［がこのような役割を果たしている］。

リムあるいは非ムスリムで、しかし他の民族からなる諸集団に、そして諸外国に対して、ただ彼ら〔西トルコ人〕の「権利を守る」ことを望んでいる。『トルコ人』紙にとって、トルコ人Türklükの軍事的・政治的・文明的過去は、ただヒュダーヴェンディギャール、〈32〉ファーティフ、セリム、イブニ・ケマル、ネフイー、バーキー、エヴリヤ・チェレビ、［ナームク・］ケマルらからなっている。オグズ、チンギス、ティムール、ウルグ・ベク、ファラービー、イブン・スィーナー、タフターザーニー、ナヴァーイーらまでに至らない…[47]。

時々、［『トルコ人』紙は］イスラム主義İslamiyetやカリフ制の政策にも接近しているようだが、［私が主張したように］統一しうるトルコ人のほぼすべてがムスリムであるゆえに、もともと重要な諸点を共有するイスラム［の統一］とトルコ［の統一］の両政策をともに推進したいと望んでいると考えられよう。しかし、これについて［『トルコ人』紙は］多くを語っていないし、主張していない***。

要するに、昔から私の頭を支配していて、私自身を納得させるような答えを私が見つけられないでいる問いが、なお私の前に立ちふさがって、答えを待っているのだ。イスラム主義Müslümanlık、トルコ主義Türklükの政策のうち、どちらがオスマン国家のためにより有益で適用可能であろうか？…[48]

ゼヴィエ村[49]（ロシア）、1904年3月15日
アクチュラオール・ユースフ

注

(1) 現ウリヤノフスク。レーニンの生地であり、彼の名ウリヤノフにちなんで改名された。
(2) Ahmet Ferit [Tek]（1878-1971）。ブルサ生まれで、士官学校時代からのアクチュラの友人。第二次立憲政時代には統一と進歩委員会と対立、共和国成立後は外交官を務めた。
(3) 1903年から1907年まで、新聞発行人で著述家のアリー・ケマルAli Kemal（1867-1922）

*** 「カリフ位の偉大な地位」―『トルコ人』、1319年カーヌーヌ・エッヴェル月18日。

がカイロで発行した定期刊行物。187号まで継続したと見られる。1907年に、アリー・ケマルがイスタンブルへ戻る前に最終号を迎えた。

(4) François Georgeon, *Aux origines du nationalisme turc: Yusuf Akçura (1876-1935)* (Paris: Institut d'Études Anatoliennes, 1980), 23-30.

(5) ただし晩年の彼の評価は高いものではなく、没後に企画された記念論集は出版されることなく終わった（Kemal H. Karpat, *The Politicization of Islam: Reconstructing Identity, State, Faith, and Community in the Late Ottoman State* (New York: Oxford University Press, 2001), 388）。

(6) M. Şükrü Hanioğlu, *Preparation for a Revolution: The Young Turks, 1902-1908* (New York: Oxford University Press, 2001), 67.

(7) 同時代のヨーロッパにおいても、アクチュラと『三つの政治路線』は注目を集めていた。アクチュラ自身による、『三つの政治路線』に言及したヨーロッパの書籍リストとしてAkçuraoğlu Yusuf, *Türk Yılı 1928*, ed. Arslan Tekin and Ahmet Zeki İzgöer (1928; repr., Ankara: Türk Tarih Kurumu, 2009), 427。

(8) Yusuf Akçura, *Üç Tarz-ı Siyaset* (Ankara: Türk Tarih Kurumu, 1976)（現代トルコ語訳）; Yusuf Akçura, *Üç Tarz-ı Siyaset*, ed. Erol Kılınç (İstanbul: Ötüken, 2015)（現代トルコ語訳およびラテン・アルファベット転写）.

(9) フランス語の全訳としてGeorgeon, *Aux origines du nationalisme turc*, 95-106、英語の全訳（ただし注38も参照）としてDavid S. Thomas, trans., "Three Types of Policies," in *Central Asia Reader: The Rediscovery of History*, ed. H. B. Paksoy (1994; repr., New York: Routledge, 2015)、英語の部分訳として Barak Salmoni, trans., "Excerpts from Üç Tarz-i Siyaset ('Three Kinds of Politics') by Akçuraoğlu Yusuf, 1904," in *The Modern Middle East: A Sourcebook for History*, ed. Camron Michael Amin, Benjamin C. Fortna and Elizabeth Frierson (New York: Oxford University Press, 2006), 320-30などがある。

(10) 秋葉淳「トルコ・ナショナリズムの生成（一九〇〇年前後）」歴史学研究会（編）『世界史史料８　帝国主義と各地の抵抗I　南アジア・中東・アフリカ』（岩波書店, 2009）, 143-45. 新井政美も詳細に検討しており、本訳業において大いに参考とした（「「青年トルコ」革命以前におけるナショナリストの動向」『史学雑誌』890/11(1980), 74-89）。

(11) この逸話は、エンゲルハルトが伝えている（Éd[ouard] Engelhardt, *La Turquie et le Tanzimat; ou Histoire des réformes dans l'Empire ottoman depuis 1826 jusqu'à nos jours* (Paris: A. Cotillon, 1882), 1:33）。

(12) ırkは、元来アラビア語の「根」という言葉に由来し、家系や血筋という意味で用いられた。ジョルジョンによれば、当時のオスマン帝国においてはトルコ人をイスラムのウンマの一部として定義するためcinsやkavimの語が用いられていたが、アクチュラはイスラムとは無関係に、自己定義されるエスニック的なトルコ人全体を示すためにırkという語を用いた。そしてそれは、身体的特徴を共有するというよりも、文化遺産を共有しているが、必ずしも同じ政治権力のもとに統合される必要のない人間集団

を指すという（Georgeon, *Aux origines du nationalisme turc*, 26）。ırkにどのような訳語を当てるかについて、文化的共有という点に着目すれば、「民族」という訳語が妥当かも知れない（たとえば新井「「青年トルコ」革命以前におけるナショナリストの動向」75, 82では「民族」と訳出している）。一方、この時代、人種思想が新しく生まれた「科学的な」考えとして、世界的な盛り上がりを見せていたことも留意せねばならない。アクチュラがこのような潮流を知っていたのは間違いなく、青年トルコ人たちも人種思想に着目していた（Hanioğlu, *Preparation for a Revolution*, 297）。とりあえず本稿ではırkを、現代トルコ語の一般的な訳語に従い「人種」と訳出した。しかしもちろん、現代の我々が用いる「人種」とは違うニュアンスで用いられていることに注意しなくてはならない。

（13） Âli Paşa（1814-71）。オスマン帝国の大宰相で、タンズィマート改革を担った政治家の一人。1852年に大宰相に就任、1854年には改革の中心機関であるタンズィマート高等審議会の責任者となる。1855年に再度大宰相に就任し、1856年3月にはパリ会議にオスマン側代表として参加し、パリ条約に調印した。

（14） Keçecizade Mehmet Fuat Paşa（1815-69）。上記アーリー・パシャとともに、タンズィマート後期の改革の中心的指導者の一人。外務大臣、最高評議会議長、大宰相職などの要職を歴任した。

（15） 1868年に開校した、ガラタサライ・リセとして知られる中等教育機関。フランスのモデルを採用した。

（16） ここでは、青年トルコ人を意味する（Georgeon, *Aux origines du nationalisme turc*, 111n2）。当時のヨーロッパ人も、新オスマン人と青年トルコ人の名称を混乱して用いていた（David Thomas, “Yusuf Akçura and the Intellectual Origins of “Üç Tarz-ı Siyaset”,” *Journal of Turkish Studies* 2(1978), 130）。

（17） Ziya Paşa（1829?-80）。フランスの思想家ルソー（1712-78）の著作『エミール』を翻訳した、タンズィマート期の官僚、詩人。1867年にナームク・ケマルとともにパリへ亡命、同年ロンドンへ渡った。ロンドンでは『自由*Hürriyet*』紙を発行し、政府を批判した。

（18） 元来は信徒共同体を指す概念であるが、19世紀後半にはネーション（国民）の意味でも用いられるようになる。

（19） 1876年12月のオスマン帝国憲法公布に中心的役割を果たした大宰相ミドハト・パシャ（1822-84）は、1877年1月に罷免され、その後二度と中央の政界に復帰できなかった。

（20） この論説が執筆されたアブデュルハミト2世期、新式学校で宗教教育が推進された。たとえば、1892年、イーダーディー校では宗教学、イスラム史、イスラム法などの科目がカリキュラムに加えられ、リュシュディエ校やイーダーディー校ではクルアーンを読むことなどに多くの時間が割り当てられた（Mehmet Ö. Alkan, “Modernization from Empire to Republic and Education in the Process of Nationalism,” in *Ottoman Past and Today’s Turkey*, ed. Kemal H. Karpat, (Leiden: Brill, 2000), 70）。

(21) イスタンブルにあるオスマン帝国期の宮殿。もともとはスルタンの狩場であったが、アブデュルハミト2世によって建てられ、彼はこの宮殿において多くの時間を過ごした。

(22) ホジャは教師、イマームは礼拝導師、サイイドとシャリーフは預言者ムハンマドの子孫、シャイフはここではスーフィー教団の指導者を指す。

(23) ウラマーを指す。当時、軍人や官僚はトルコ帽着用を義務付けられていた。

(24) テッケもザーヴィエもスーフィー教団の修道場。

(25) アブデュルハミト2世は、インド、スマトラ、ジャワ、アフリカ、日本そして中国のムスリムとの交流に努めていた。とくに南アフリカには強い関心を寄せ、イスラムを布教するために当地に派遣された使節と連絡を取り合っていた（Karpat, *Politicization of Islam*, 233, 275）。

(26) 1900年に着工、1908年に開通したダマスカス－メディナの巡礼路を結ぶ鉄道。

(27) Léon Cahun（1841-1900）。ユダヤ系フランス人の東洋学者。青年期に中東に旅行し、その後オリエントに関する論考や小説を発表。1890年には、ソルボンヌ大学でアジアの歴史と地理についての講義を行い、1896年に『アジア史序説*Introduction à l'histoire de l'Asie*』を執筆した。

(28) 本論考の執筆時においてアクチュラのカオン評価は、留保をつけたものであった。しかし1910年以降のアクチュラは、カオンの主張を受け入れ、モンゴル人とトルコ人が同じ民族であるという主張や、チンギス・ハン称賛を繰り返すようになる。その理由として、トルコ人とタタール人の同一性はアクチュラにとって都合が良かったこと、そしてオスマン帝国の偉大さが喪失した埋め合わせとしてチンギスが持ち出されたことが挙げられる（Georgeon, *Aux origines du nationalisme turc*, 51-52）。アクチュラの「チンギス」と題された論説では、オスマン帝国に害をなしたナポレオンが肯定的に評価されているのに対し、チンギス・ハンが破壊者と見なされていることに疑義を呈している（Hilmi Ziya Ülken, *Türkiye'de Çağdaş Düşünce Tarihi* (1966; repr., İstanbul: Türkiye İş Bankası, 2013), 572）。

(29) Ahmet Vefik Paşa（1823?-91）。オスマン帝国の官僚・文人。1877年にオスマン帝国議会初代議長、その後大宰相を二度務める。トルコ語－トルコ語辞典である『オスマン語辞典*Lehçe-i Osmanî*』（1876）は彼の主要著作の一つ。

(30) Şemseddin Samî (Frasheri)（1850-1904）。オスマン・アルバニア人の文学者。『トルコ語辞典 *Kamus-ı Türkî*』（1901）を編纂。最初のオスマン・トルコ語の小説を著したことでも知られる。

(31) Mehmet Emin [Yurdakul]（1869-1944）。政治家、詩人。1869年にイスタンブルで生まれ、のちに口語のトルコ語に基づく民族主義文学活動を展開した。代表作として、『アナトリアからの声、あるいは戦場にむかうとき*Anadolu'dan Bir Ses Yahut Cenge*』。

(32) Necip Asım [Yazıksız]（1861-1935）。歴史家であり言語学者、政治家。1861年にキリスで生まれ、のちにダーリュル・フュヌーンにおいて言語学や歴史学を教授、オスマン歴史協会にも所属し、1900年にはメフメト・アーリフとともに『オスマン史』を著し

た。

(33) Velet Çelebi [İzbudak]（1869-1953）。メヴレヴィー教団のシャイフであり、新聞の編集やリュシュディエ校の教師などさまざまな職を務める。第二次立憲政期にアクチュラが主導したトルコ協会Türk Derneğiに参加。共和国期には著作・翻訳委員会やトルコ言語協会で活動した。主な著作に『トルコ語*Türk Dili*』、『トルコ語入門*Türk Diline Medhal*』。

(34) Hasan Tahsin（1811-81）。アルバニア出身のオスマン人学者。ウラマーの家に生まれ、1857年にトルコ人留学生の宗教教育を支援するためにパリに派遣された。1869年にイスタンブルに帰還、それからダーリュル・フュヌーンの総長に任命された。

(35) 1894年にイスタンブルで創刊された日刊紙。

(36) 19世紀末頃、カザン・タタールのあいだで発展した文学。ムーサー・アクイイトザーデMusa Akyiğitzade、サドリ・マクスーディーSadri Maksudî、アブドゥッラー・トカイAbdullah Tokay、アヤズ・イスハーキーAyaz İshakîがその代表である（Georgeon, *Aux origines du nationalisme turc*, 112）

(37) 1867年にタシケントを首府としてロシアが設置したトルキスタン総督府は、20世紀初頭には、おおよそ今日のウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタンの領域を含んでいた。ただし、ブハラ・アミール国とヒヴァ・ハーン国はロシアの直接統治下にはなく、保護領であった。ここではブハラ、ヒヴァを含むこの中央アジア地域を指して使われていると考えられる。

(38) トマスによる英訳では、ここから15頁第2段落の前まで欠落している（Thomas, trans., “Three Types of Policies,” 108）。

(39) 該当書の著者ルイ・リアールLouis Liard（1846-1917）は、パリ大学区の副区長としてパリの教育行政全般を統括、フランス全体の教育行政にも従事した人物。主要著作に『幾何学的定義と経験的定義』『ユニヴェルシテとファキュルテ』などがある（白鳥義彦「ルイ・リアールとフランス第三共和政の高等教育改革」『神戸大学文学部紀要』41(2014):143-58; 白鳥義彦「フランス第三共和政における高等教育改革の中心者ルイ・リアール: その生涯と思想（IV-1 部会 高等教育 (4)）」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』47(1995):163-64）。

該当書は、1884年に刊行された『哲学講義：論理学*Cours de philosophie: Logique*』であり、第7章が「Méthode des sciences morales」と題されている。本日本語訳では、1897年刊の第四版を参照した（アクチュラが参照した版は不明だが、第四版での該当箇所は183頁である）。日本語訳は、オスマン語テキスト（フランス語原文と細かな違いがある）に準じた。フランス語原文は次の通り：Pour les uns, les règles du gouvernement des hommes sont tout idéales; elles se formulent à priori, comme les axiomes mathématiques, et l’œuvre des gouvernants doit être d’appliquer ces règles aux sociétés, comme l’arpenteur applique à son art des règles dérivées de la géométric pure. Pour les autres, les sociétés portent en elles-mêmes les lois auxquelles elles obéissent, et elles les révèlent elles-

mêmes en se développant; dès lors la science politique, sans renoncer à poser un idéal à l'activité humaine, doit tendre à dégager les lois sociales et historiques des faits où elles se sont manifestées, et tenir compte des milieux, des circonstances, des préjugés et des passions.

(40) ここでの「国家の力」という表現は、社会ダーウィニズムに基づいた生存競争が念頭に置かれていると考えられる。参考として、Georgeon, *Aux origines du nationalisme turc*, 21。

(41) これは、ロシアの勢力伸張を警戒するイギリスやフランスなどがオスマン帝国の領土保全を主張し、その見返りにオスマン政府に種々の改革を強要していた事実を指す。

(42) 6世紀に東ローマ皇帝ユスティニアヌス1世によってコンスタンチノープルに建設されたハギア・ソフィア聖堂。1453年のオスマン帝国による征服以来、モスクとして利用されていた（現在は博物館）。

(43) 1856年に結ばれたクリミア戦争の講和条約。

(44) 656年から661年にかけての第一次内乱を指す。この内乱は預言者ムハンマドの後継者の地位をめぐって発生し、ウマイヤ家のムアーウィヤがハーシム家のアリーを破って終結した。以降、ムスリム共同体の首長はウマイヤ朝、そしてアッバース朝へと引き継がれる。これを受け入れずアリーとその子孫のみを預言者ムハンマドの後継者とする人々がシーア派を、受け入れる人々がスンナ派を形成した。アクチュラは、アラブとイランの対立がスンナ派とシーア派の対立であり、その端緒が第一次内乱にあると見なしているようである。

(45) taassupはしばしばfanaticismと訳されるが、この時期にはzealあるいはpassionの意味で用いられていたという（Karpat, *Politicization of Islam*, 392）。

(46) この部分は、アルバニア人、ボスニア人、ラーズ人などを念頭においていると考えられる。なおジョルジョンによれば、アクチュラののちの論説では、トルコ化の問題に触れていないという。1911年に著された「諸民族の統一という問題」という論説においてアクチュラは、他民族をトルコ化することは無駄な努力であると論じている（Georgeon, *Aux origines du nationalisme turc*, 29）。

(47) 「ヒュダーヴェンディギャール」から「ケマル」まではオスマン帝国の、「オグズ」から「ナヴァーイー」までは、オスマン帝国外の（アクチュラが見なすところのトルコ系の）人物。

前者のグループについて、ヒュダーヴェンディギャール（ムラト1世、位1360頃-89）、ファーティフ（メフメト2世）、セリム（1世）はいずれもオスマン帝国君主。イブニ・ケマル（1468/9頃-1534。別名ケマル・パシャザーデ）は法学者にして歴史家、ネフイー（1572-1635）とバーキー（1526-1600）は高名な古典詩人。エヴリヤ・チェレビ（1611-84）は『旅行記』で知られる文人で、ナームク・ケマル（1840-88）は新オスマン人の代表的人物である。

後者のグループについて、オグズ・ハンは伝説的なトルコ族の王、チンギス・ハン（1162頃-1227）はモンゴル帝国を築いた君主で、ティムール（1336-1450）とウル

グ・ベク（1394-1449）はティムール朝の君主。ファラービー（870頃-950）とイブン・スィーナー（980-1037）は中央アジア生まれのイスラム哲学者、タフターザーニー（1322-89/90）とナヴァーイー（1441-1501）はそれぞれティムール朝期の著名な学者、詩人である。

（48） アクチュラはのちに、『三つの政治路線』では「トルコ主義の政策」と「諸トルコ人の統一」、そして「イスラム主義の政策」と「イスラムの統一」を区別していなかったと自己批判している。オスマン帝国はオスマン国内に限った形でそれぞれ前者を採用したのであり、これを考慮に入れていれば1908年以降の出来事をより明確に説明できたであろう、と述べている（Akçuraoğlu Yusuf, *Türk Yılı 1928*, 426）。

（49） シンビルスク近郊の村。この村の名前の読み方については諸説あるものの、ここではAkçuraoğlu Yusuf, *Türk Yılı 1928*, 422に従った。叔父ユースフ・ベイの家があり、フランスでの留学を終えたアクチュラはここに滞在して『三つの政治路線』を執筆した。アクチュラの父ハサン・スレイマンオールは、この近辺で三つの織物工場の所有者であった（Georgeon, *Aux origines du nationalisme turc*, 12, 23）。